

## 【研究ノート】

# 外国人の失礼な日本語表現について

## — 待遇表現の間違いと見えにくい用例 —

マスデン眞理子

### 要 旨

外国人が日本語を話す時、日常会話はほぼこなせるが、日本語のニュアンスを知らないために、本人にはそのつもりがないのに、失礼な言い方をすることがある。これを筆者は待遇表現の間違いと考える。文法や漢字の間違いに比べ、待遇表現の間違いは、日本語の間違いと分かりにくいものが多い。そのため、まわりの日本人から失礼な人、ずうずうしい人、わきまえない人などと誤解され人間関係が気まづくなるケースもある。失礼な言い方をするのは、日本語の待遇表現についての知識が不十分なためであるが、授業では学習者が間違いやすい待遇表現について、何がどう失礼なのかを具体的に教えられておらず、教材も十分とはいえないのではないだろうか。

そこで、本稿では学習者が間違いやすい待遇表現をどう教えたらよいかという視点で、待遇表現の不適切な用例を集め、それぞれの用例について、中級以上の日本語学習者を想定し、なぜ聞き手からは失礼に感じられるか、代わりにどう言えば適切かについて解説した。

### 1. はじめに

筆者は大学で留学生に日本語を教えているが、日本語の中級から上級レベルの留学生と話していると、時々「えっ」と思う失礼な表現が留学生から出てくることがある。例えば、ある時こんなことがあった。ある留学生が私に会いたがっているという話を事務から聞いていたが、こちらから連絡をとるのをすっかり忘れていた。数日後その留学生が研究室に現れた。私が「ああ、xx さんですね。事務から連絡をもらっていました。こちらから連絡しないで、すみません。」と言うと、留学生は「いいですよ。」と答えた。「すみません」という謝罪に対し、「あっ、いえ」などの否定がその前に入らず、いきなり「いいですよ」の第一声にこちらは、まるで部下が上司に叱られたようで、少々たじろぎ、この人は一体どういう人だろうと怪訝な気持ちを抱き

つつ話を始めた。実際には、不遜な態度などなく明るく真面目な学生だった。

明らかに初級レベルで日本語の話がたどたどしい場合は、失礼な日本語表現をしても、それは外国語の知識がないからだ、それほど人は苛立たない。しかし中上級レベルで、まちがって失礼な物言いをする、日本語のニュアンスがわからないからとは思われず、「失礼な人」「非常識な人」「わきまえない人」というように人格の問題と誤解される危険性が高くなる。こちらがその留学生をよく知っている場合は、日本語力の問題だと気づくことができようが、あまり知らない相手はそうはいかないだろう。実は人格の問題ではなく、外国語としての日本語の語法についての知識不足によるまちがいにすぎないことが、人間関係の軋轢を生じる結果になる可能性もある。

日本語学習者が、そのつもりがないのに失礼な物言いをする事例は、多くの日本語教師が気づいていることであり、アルクの『月刊日本語』（1993）には、「日本語講師がとまどう外国人の日本語」という特集が組まれ、失礼な表現が取り上げられた<sup>(1)</sup>。教師の側は困ったものだと思いつつも、どう教えればよいかは容易ではない。文法や漢字のように教えるための知識が整理されていないからだ。学習者は授業で教えられないことを、それぞれの教室外の日本語コミュニケーションの場面で気づかなければならない。だが、実際のコミュニケーションでは、親子のような内輪の関係でもないかぎり、大人の外国語話者に向かってそれは失礼だなどと指摘してくれる相手は減多におらず、失礼な外国人というレッテルを貼られてしまう。日本語で失礼な表現はどんなものなのか、という失敗談のようなものを授業で習うことができれば、日本語学習者は現実場面での苦い体験を重ねることなく、失礼な物言いについてのセンスが養われてくるのではないだろうか。

そこで本稿では、筆者が耳にした失礼な日本語表現を紹介し、将来の教材の素材に供したいと思う。これらの用例は、現段階ではシステムティックに整理・分析されたものではなく、筆者が授業や日常生活において外国人とのやりとりのなかで拾い上げたものを、覚え書きとして記すものである。

## 2. 待遇表現の不適切な使用に関する先行研究から

前述した「いいですよ」という返答を筆者は、待遇表現のまちがいと考える。待遇表現については、いわゆる敬語を含む「丁寧さ」を表す表現に限定する立場もあるが、熊井（2003: 32-33）は人間行動におけるその広がり注目して、「丁寧さ」を表す表現だけでなく、くだけた言い方や乱暴な表現

もこれに含めて考えるという立場をとっており、筆者もこの立場から、待遇表現を広い意味でとらえたい<sup>(2)</sup>。待遇表現の定義を、熊井（前掲書：43）では、「表現主体」が「環境」に配慮した結果、ある待遇レベルを決定し、自己の表現内容を伝えるのに最もふさわしいと思われる表現や表現手段を選択する、その表現としている。

例えば、相手を〇〇さんと呼ばず「お前」と呼ぶのは、人間関係が密接であることを示す、身内意識という環境に配慮した結果のことであるが、本稿でとりあげるのは、日本語学習者が、それほど親しくない友だちに向かって「お前」と呼びかけた場合など、待遇表現が間違ったケースである。日本語学習者に適切な待遇レベルを決定できるだけの日本語および日本文化に関する知識がないため、不適切な待遇レベルの表現を選択してしまい、相手に不快な感情を引き起こしてしまう。

館岡（1993: 14-15）は、不適切な待遇表現を、「不快な感じがするもの」と「ちょっと変だが不快ではないもの」の二つに分けている。前者の「不快な感じがするもの」としては、例えば原稿のチェックを先生にお願いする際に、学生が先生に「見ていただけますか」と言うべきところを、「見せてさしあげます」などと言うことを指す。「さしあげます」という丁寧な言葉を使って聞き手の先生を上位化しても、聞き手の先生の益になるような「～あげる」という表現を用いているので、聞き手は不快を感じる。後者の「ちょっと変だが不快ではないもの」の例は、アメリカ人の学生が目上の先生に対してほめるという行為などで、日本のわきまえからするとちょっと変だが、むしろ好意的に受けとめられるかもしれず、不快度は前者ほど強くない。館岡は、特に前者に類する不適切な待遇表現については、すぐ直す必要があり教育上このようなことがもっと強調されなければならない、学習者が実際の場面で使えるよう体系的教育を行うべきだという課題を投げかけた。

この館岡の提言から10数年経つが、敬語に留まらない広い意味での待遇表現の教育は、あまり進んでいないのではないだろうか。日本語を話して失礼にならないように、敬語を学ぶことはとても大切だという認識が学習者に高いものの、広い意味の待遇表現の重要性については見過ごされる傾向がある。熊井（2003: 43）は、「一見待遇表現とは無関係に見えても、利害や権限の有無にかかわる表現」として、「会っていただけますか」と言うべき状況で、留学生から「私に会いたいですか」と言われてどきとした体験に触れ、「～たい」のようなごく日常的な表現が、その使い方一つで相手に不快

感を感じさせたり、誤解を与えたりするおそれがあり、これらは単なる待遇表現上の間違いであると認識されにくいだけに、その過失は深刻で、狭い意味での敬語の間違い以上に対人関係に大きな摩擦を引き起こす可能性が高いと述べている。「私に会いたいですか」では、「～たい」を使ったことで、本来の受益者は学生であるのに、まるで先生であるかのように聞こえたことが問題なわけだ。しかし、このような「～たい」の不適切な使用例について、授業で十分に教えられていないのではないだろうか。初級の日本語授業で「～たい」を導入する時に教えては混乱を招くので不適切だろうが、中級以降になって授受動詞がわかってきた段階では「～たい」の不適切な使用例について積極的に教えるべきであろう。

熊井（前掲書：41）はさらに、授受動詞を使わないことが不適切なケース（例えば、「山田さんが私に英語を教えた」）や、反対に授受動詞を使ったことが不適切なケース（例えば、「先生、おいしいおかしがあるので、今度持ってきてさしあげますね」）を示し、「自分が利益を得たことは最大限に表現し、他者に利益を与えたことは最小限に表現せよ」という原則は多くの言語に当てはまる普遍的なルールであると考えられるが、日本語の場合、利益の授受を表す専用の形式が発達していることから、特にこの原則が強くはたらく言語であるため、授受動詞の不適切な使用はこの原則に対する重大な違反となり、単なる文法上の間違い以上の違和感を相手に感じさせることになる」と説明している。

ある内容を伝えるには、丁寧さの度合いによってさまざまな表現があり、相手と自分の位置関係から最適な表現を選ぶことにより、良好な人間関係を築くことができる。このことは日本語に限ったことではなく、どの言語にもみられることだ。井出、他（1986: 43-50）は日本人大学生とアメリカ人大学生の敬語行動に関する対象研究を行った結果、同様の要因によって敬語表現の使い分けが行われているものの、要因の強さ（相手の人物カテゴリーや場面）において、日米で差があることを発見した。日本人大学生の方が、どういう相手・場面にはどういう表現を使うかということに関して比較的はっきりしたルールがあるという。他方、アメリカでは、丁寧度の低い表現を丁寧度の高い相手に使わない、丁寧度の高い表現を丁寧度の低い相手に使わないという傾向はあるが、日本ほど表現と相手にそれぞれ対応するはっきりしたルールがないことが観察された。このことを井手は日本のように相手による敬語表現の使い分けのはっきりしている型を、視覚的にとらえた図の見え

方から「クッキリ型」と呼び、アメリカのように相手による使い分けルールがはっきりとは見えないものを「ボンヤリ型」と呼んだ。「クッキリ型」の社会では、丁寧さを欠いた表現が明確であるため、言い方を間違えると失礼だという意識がより強く働くのではないかと考えられる。この研究は、ペンを貸してと頼む時の表現を、教授、親しい友だち、家族などの相手でどのように言うかを日本語と英語で尋ねたものであり、この結果だけで丁寧さに関する表現の多様性についての表現の分布を日本はクッキリ型、アメリカはボンヤリ型と一般化することは早急であろうが、示唆に富む発見である。日本語に「クッキリ型」の傾向が強いとすれば、外国人が日本語を使う場合、どんな表現が丁寧さを欠くのかを、文脈や場面のなかで具体的に学ぶことはますます重要である。

蒲谷（2006: 61-63）は、人間関係や場に対する「配慮」、相手に対する「敬意」を「丁寧さ」という用語で括り、「丁寧さ」の原理として、①「行動」、②「決定権」、③「利益」の3つに分類している。例えば、先輩に「すみません。その本を取っていただけますか。」という依頼表現において、①「行動」については、本を取るという行動をするのは相手の先輩であり、相手に行動させるというのは「丁寧ではなく」、「当然性も低い」と言える。②「決定権」は、だれが、その「行動」をするかどうかを決める力を持っているのか、ということを目指し、依頼表現ではその決定権も相手に委ねることが丁寧であると考えられる。例えば、「本を取ってください」と言うと、相手に指示できる「当然性が高く」、相手は断りにくくなり、相手に行動の決定権を持たせない表現となってしまう。③「利益」とは、だれがその「行動」によって「恩恵」を得たり、「恩恵」の意識を持つのかということだ。丁寧さの原理においては、その利益が自分にあることを表すほうが丁寧になり、逆に、相手に利益を与えることを表明するのは丁寧ではないことになる。すなわち、蒲谷の丁寧さの3つの原理を整理すると、だれが「行動」するのか、だれがその行動の「決定権」を持ち、だれが「利益」を受けるのかがポイントとなる。最も丁寧であると言えるのは、「行動」＝自分、「決定権」＝相手、「利益」＝自分、という認識を示した表現である。

以上のような知見を背景に、待遇表現の間違った使い方の用例を次章でとりあげる。

### 3. 間違った待遇表現の用例

丁寧さのルールに違反し、聞き手の日本人にとって不快な気持ちになる表現を、間違った待遇表現の用例として紹介する。それぞれの用例について、①会話例、②背景、③解説（なぜ失礼か、どう言えばよいか、を中上級日本語学習者向けに説明）を記した。

ここで取り上げる用例は、主に筆者が担当した初中級会話のロールプレイからであるが、その他にも初中級作文の授業や、学外の外国人などの日常会話の中で収集したものであり、次の8つの用例を取上げる。

#### 〈用例一覧〉

- 1) 「～ですよ。」「～でしょう。」
- 2) 授受動詞
- 3) あいづち
- 4) 謙遜・ほめる
- 5) 人を誘う・誘いを断る
- 6) 人に頼む
- 7) 曖昧な表現（「考えさせてください」）にどう応じるか。
- 8) その他

以下に、1) ～ 8) の具体例を述べる。

- 1) 「～ですよ。」「～でしょう。」

#### ●会話例①：「麺がよそりにくいんだよ。」

背景：筆者の夫は日本語歴30年のアメリカ人で、日本語での間違いはほとんどないのだが、ある時、夕食のチキン・ヌードルスープ（チキンスープにスパゲティの麺を加えたもの）をよそってと夫に言うと、夫が「麺がよそりにくいんだよ。」と言った。

解説：夫は、麺がお玉からするりとすべって、よそりにくいということを伝えたかっただけなのだが、「麺がよそりにくいんだよ。」と言われると、よそってと頼んだ筆者に文句があるように聞こえた。

よそってと言われたことが不服で相手に文句を言っているわけではなく、

単に困ったなという気持ちを伝えたいなら、「～んだよ」の「よ」は使わずに、「麺がすべっちゃって、よそりにくいんだ。」や「よそりにくいなあ。」  
「よそりにくいんだよね。」などがよいだろう。

●会話例②：「やっぱり、リードがなくちゃだめなんだよ。」

背景：筆者の家では小型犬（シーズ）を飼っている。犬は飼い主の指示によく従うので散歩にはリードを使わなくてよいと夫は言っているが、筆者はもしの場合に備えてリードをしたほうがいいのではと言っていた。ある日の夕方、夫はいつものようにリードなしで散歩させていたら、道の角で犬の苦手な女性に会って、キャーっと叫ばれたという。犬の散歩から帰ってきた夫が筆者に向かって「やっぱり、リードがなくちゃだめなんだよ。」と言った。

解説：「リードがなくちゃだめなんだよ。」というのは、散歩にリードが必要なのに、君は使わなかったのかと、まるで聞き手（筆者）が非難されているように聞こえた。実際にリードを使わなかったのは夫のほうであり、夫が自分の過失を誤摩化しているように聞こえむっとした。しかも、「やっぱり」が付け加えられと、再三ばかりが注意していることじゃないか、というニュアンスまで出てくるから尚更ひどい。

夫には自分の失敗を誤摩化そうなどという意図はみじんも無かったのだから、その際の適切な表現としては、「やっぱりリードがなくちゃだめなんだ（よ）ね。」がよい。語尾に「ね」を付けるだけで、相手に対する非難は全くなくなって、ああ、失敗しちゃったなという気持ちをそのまま伝えることができる。

●会話例③：「卒業式、出られないんですよ。」

背景：息子（中3）の髪が長過ぎるので、短くしないと卒業式に出られないと担任の先生に言われた。卒業式まであと3日しかない。そこで息子はいきつけの床屋に電話を入れて、「あのう、〇〇です。実は髪が長すぎるって言われて…、短くしないと卒業式に出られないんですよ。」

解説：「出られないんですよ」なら気にならないが、「出られないんですよ」

と言うと、聞き手（床屋さん）に対し、なんとか今日か明日中に髪を切ってくれと強く要求している。その電話を横で聞いていた筆者は、息子が無理に予約を入れる口のきき方にかちんときた。だが、この床屋さんの子と息子は小学校からの同級生で家族ぐるみのつきあいがあるので、床さんは笑って「じゃあ、明日の晩7時半に来れる？」と営業時間外に予約を入れてくれた。

このような親しい間柄でなければ、「出られないんです。」と切り出し、「それで、大変申し訳ないんですが、今日か明日、なんとかお願いしたいんですが…」というふうに依頼するのが適切だろう。

●会話例④：「××さん、知っているんでしょう。」

背景：初中級作文の宿題で、友だちを誘うメールを書かせた。その中に、「××さん、知っているんでしょう。今度いっしょに富士山に登る予定です。○○さんもいっしょに来ませんか。」という一節があった。

解説：「知っているんでしょう」と言われると、読み手に対して「隠しても無駄ですよ。あなたが××さんを知っていることはもう分かっているんですから。」とまるで読み手が知らないふりをしていたことを責めている感じがする。

「～んでしょう」の「ん」は使わず、「××さんを知っているでしょう。」とすれば、全く問題ない。もしも、××さんを知っている可能性がそれほど高くなければ、「知っていますか。」と言うのがいい。

2) 授受動詞

●会話例⑤：「私は国に帰ったら、先生に手紙を書いてさしあげます。」

背景：帰国する留学生が挨拶に来て、これからも日本語の勉強を続けたい、熊本のことと忘れないと言った後、「私は国に帰ったら、先生に手紙を書いてさしあげます。」と言った。

解説：これは不適切な授受動詞の使用例で、前述した館岡の例（先生に原稿チェックをお願いする時の「見せてさしあげます」）と同様の間違いである。無理に敬語を使おうとせず、「先生に手紙を書きます。」がよい。



●会話例⑥：「ついでに、このゴミを捨てますか。」

背景：初中級会話のロールプレイ。今日は燃えるゴミの収集日で、キッチンには大きなゴミ袋がある。朝ルームメイトが外出する様子を見て、「お出かけですか。それなら、ついでにこのゴミを捨てますか。」と尋ねた。

解説：相手がこれからゴミを捨てるかどうかという予定を尋ねているのではなく、相手にごみを捨ててほしいという依頼している。だから、話し手はゴミを捨ててもらえると助かるという受益の気持ちを、授受動詞を使って表現すべきだ。さらに、ここでは丁寧さのレベルが一貫していないのも問題だ。「お出かけですか」や「それなら」と丁寧な言い方をしているものの、他方で「ついでに」を使って、ゴミを捨てるという行動を相手になれなれしく頼んでいる。

少々距離のある相手に丁寧に言うなら、「お出かけでしたら、すみませんが、このゴミを捨てていただけますか。」がよいだろう。ルームメイトなら、「出かけるの？　じゃ、ついでにこのゴミ捨ててくれる？」でよい。

●会話例⑦：「ぼくはバイトしたくない。ぼくのために、バイトをしてくれますか。」

背景：留学生と日本人学生の合同授業でロールプレイをさせた。留学生はゼミの忘年会があるので、同じバイト先の日本人学生にシフトを代わってほしいというお願いをする。その依頼の文。

解説：ロールプレイをした日本人学生は、この留学生は本音を言い過ぎだと感想を述べた。忘年会があるという事情を述べ、本音は言わず「悪いけど、バイト代わってくれる／くれないかなあ。」がよいだろう。

3) あいづち

●会話例⑧：

私「アパートに入ることについて、本当にご面倒をおかけしました。」

田中「うん、そうですね。」

背景：初中級会話のロールプレイ。アパート入居の保証人を田中さんをお願いするという設定で、シナリオを書かせた。その会話の一文。

解説：相手がお礼やお詫びを言ったら、まず「いいえ」と否定するのが礼儀だ。「ご面倒をおかけしました。」と詫びていることに対して田中さんはいきなり、「うん、そうですね」と言ったため、いかにも自分は面倒をかけられたという不服の意味になってしまった。「いや、ちっとも。お役にたててよかったです。」などが適切だろう。

●会話例⑨：

Aさん「ディズニーランドに行ってきた、とても楽しかった。」

Bさん「そうでしょうか。」

背景：初中級会話のあいづちの練習。Aさんがディズニーランドに行った話をして、Bさんがあいづちをうつ場面。

解説：この留学生に、なぜ「そうでしょうか。」を使ったのか聞いたところ、「Bさんはディズニーランドに言ったことがないので、本当に楽しい所かどうか分からないので。」と答えた。「そうですね。」が使えないので、「そうでしょうか。」にしたらしい。だが、「そうでしょうか。」は「か」があるため、相手に反対意見を述べ、ディズニーランドは楽しい所だとは思えないという意味になってしまう。

ここでは、「そうでしたか。よかったですね。」が適切だろう。

●会話例⑩：

Aさん「新しい会社はどう？」

Bさん「うん、社員20人ぐらいの会社なんだよ。」

Aさん「小企業だね。」

背景：中級会話授業のあいづちの練習。就職したばかりの友だちとの会話から。

解説：大企業とは違い、一般に小企業というのは褒め言葉にはならない。自

分の会社を謙遜して「小企業だよ。」と言うのはいいが、相手にむかって「小企業だね。」と言ってはいけない。うまいあいづちが出ない時は、Bさんの「社員20人ぐらいの会社なんだよ。」に深入りせず、Aさんは「そう。それで、どんなことをする会社なの？」と質問をする手もある。

●会話例⑪：

Aさん：夫の仕事の関係で、家族で外国に住むことになりました。

Bさん：それは、ちょっと寂しいね。

背景：中級会話授業のあいづちの練習。友だちが海外に引っ越すと聞いた時の応答が、「ちょっと寂しいね。」だった。

解説：「ちょっと」という言葉が口癖になっている日本語学習者がいる。断るときの「ちょっと…」など、便利な表現なためか、「ちょっと」が不適切な場面でも、意味を考えずについ「ちょっと」を使ってしまう。これもその例で、「ちょっと」があると、かなり失礼。

4) 身内を謙遜する

●会話例⑫：〈無理に謙遜して…〉

友だちのお母さん：「おじょうさんは、頭がいいですね。」

母：「いいえ、いいえ。娘は最後の試験をしくじりました。人生をしくじると思います。」

背景：初中級会話のロールプレイ。母親と買物に行ったら、友だちのお母さんに会った。自分の母親と友だちのお母さんが、相手の子をほめる・自分の子を謙遜する場面の会話を書いてもらった。その中の一節。

解説：欧米の留学生は身内を謙遜する表現に慣れていないため、「謙遜＝けなす、悪く言うこと」と解釈したようだ。「人生をしくじると思う」というのは言い過ぎで、試験で失敗した位でやめておいたほうがいい。

日本人なら、謙遜の定型表現を心得ていると思うが、留学生にはどのあたりまでが謙遜で、どこからはけなしているかの境がわかりにくいのだろう。ほどほどの謙遜ができない例としては、授業のロールプレイ（恋人をほめら

れて何と言うか)で、「いいえ、恋人はまったくかっこよくありません。だれも私の恋人がほしくありませんでした。」や「いいえ、写真がいいだけです。実はこの人は本当にきれいじゃない。その上にばかですよ。」などがあった。

●会話例⑬：〈謙遜は嘘か?〉

Bの母：「Aさんは運動がすごくできてすばらしい。」

Aの母：「いえ、とんでもない。運動ばかりで、勉強はちっともできなくて。ほんとに困っちゃうんですよ。いいですね、Bさんはお勉強ができて。」

Bの母：「私の子は家でよく勉強しています。勉強が好きです。もしAさんは勉強の問題があれば、私の子供が手伝いましょうか。」

背景：前述の⑩と同じ初中級会話のロールプレイ。このロールプレイはBのお母さん役をヨーロッパの留学生、Aのお母さんと息子（Aさん）役を日本人学生に演じてもらった。

解説：演じてもらった日本人学生と留学生に感想を聞いた。まず息子のAさん役の日本人学生に「お母さんに『ちっとも勉強しない』って言われた時、どんな気持ちでしたか」と尋ねると、「いやあ、それが普通っていうか。別に何とも。」続いて、「じゃ、友だちのお母さん役の留学生に『うちの子はよく勉強する』とか、『あなたの勉強を手伝いましょうか。』って言われた時の気持ちは?」と聞くと、「それは、びっくり。自分の子供の自慢をするのに驚いた。」と答えた。

次に友だち（B）のお母さん役をした留学生に感想を聞いてみると、「正直に言ったほうがいいと思う。もし、本当は勉強ができるのに、できないとか困っているというのは、嘘をついていることだと思う。」と答えた。

身内の謙遜表現は定型化しているので、日本人同士では嘘をついているという意識はなく、挨拶のようなものなのではないだろうか。身内を謙遜することについては文化的な価値の相違も大きいですが、人前で自分の子供を謙遜する定型表現が留学生にはあまり分かっていないようだ。

●会話例⑭：（ほめる）

料理がとてもおいしいです。また食べにきます。

背景：初中級会話のロールプレイ。日本人のホストファミリーの家に初めて招かれて、晩ご飯をご馳走になった。ホストファミリーが作ってくれた料理をほめる場面での一節。

解説：初めて家に招かれて、客の方から「また食べに来ます」と言うと、ホストがミリーはびっくりするのではないだろうか。これを書いたのは韓国からの留学生で、若い人が年長者に対しこのような親しみを積極的に示すと好感を持たれると筆者に説明してくれた。

「また食べに来ます。」という表現は、文字通りの意味を意図しているのだろうか。恐らく、来週もまた招待してもらうことを本気で期待しているわけではなく、社交辞令なのではないだろうか。親しみの表現として「また食べに来ます」という表現を聞き慣れていれば、驚かないだろうが、日本では付き合いの初期段階で、このような親しみの表現を示すと文字通り受け止められ、「ずうずうしい」と誤解されかねないだろう。

これに対をなす表現として日本では「今度いっしょに昼ご飯でも食べましょう。」など、「今度」を使った誘いがある。言った側は近日常に誘う予定はなくても、こう言われた留学生は文字通りに受け止め誘いを待って、がっかりすることがある。母語話者同士の会話ではなく、外国人と話す場合は、言葉の文字通りの意味を考えて話すことも大切なことだ。

## 5) 人を誘う

### ●会話例⑮：

「私の部屋に来て、ビールを飲まないの？」

「私の部屋に来たくないの？」

「いっしょにお酒を飲みに来たくないんですか。」

背景：初中級会話のロールプレイ。友だちに電話をかけて、いっしょに晩ご飯を食べよう／ビールを飲もうと誘う時のフレーズ。

解説：日本語では「飲まないの」や「来たくないの」など、「の」があると、相手が来たくない様子を腹を立てて相手を責めている感じがする。「の」を取って、「飲まない？」ならいい。また、「来たくない？」より、「来ない？」の方がよいだろう。

6) 誘いを断る

●会話例⑯：

「今夜はできない。」

「今日はだめ。」

「無理。」

背景：前述の⑮のロールプレイでの誘いを断る時のフレーズ。

解説：いくら友だちでも、これらの表現は失礼なのではないかと思われる。ところが、日本人学生と留学生の合同授業のロールプレイで日本人学生が実際にこのように断っているので、びっくりした。クラスの他の日本人学生たちに尋ねたところ、半分くらいがこれらの表現は友だち同士なら普通だと答えた。筆者との世代の違いや好みの問題とも言えるが、「あっ、ごめん。今日は宿題が忙しくて。また、今度」というように、謝罪、理由説明、次回への期待などが丁寧で望ましいだろう。

7) 曖昧な表現（考えさせてください）にどう応じるか。

背景：初中級会話のロールプレイ。アパートの保証人を田中さんにお願いしたが、「考えさせてください」と言われ、数日経っても返事がないので心配になり、田中さんに電話するという会話を書いてもらった。⑰－1、⑰－2、会話例⑰－3は3人の留学生のシナリオから抜粋。

●会話例⑰－1

私：ええと、アパートの申込の締め切りはあと4日で、田中さんはもう考えましたか。

田中：ごめんなさい。私は保証人になれないと思います。力になれなくて、すみません。

●会話例⑰－2

私：保証人について考えてみましたか。

田中：そうですね。ちょっと…

私：お願いします。

田中：あなたの力になりたいんですけどね…

私：なんとかできないんですか。

田中：できないことはないですけどね…

●会話例⑰-3

私：前話したことは明日締めきりになりますけど。田中さんはどう考えていますか。

田中：アパートについての話ですね。あのう、それはちょっと…

私：あ、なるほど。じゃあ、保証人になる人はだれだろう。

田中：小林君はどうですか。

解説：依頼に対し「考えてみます」と言っただけで、すぐにいい返事が来ない時は、断りたがっていると察したほうがよいのではないだろうか。ところが、ここで紹介した留学生の例は、相手が断りをはっきり言いたくない心情には配慮せず、「もう考えましたか。」「考えてみましたか。」「どう考えていますか。」とはっきりした回答を求めているため、相手からは察しが悪く失礼だと思われる可能性が高い。「考えてみます。」という言葉にこだわらず、「アパートの保証人の件は、いかがでしょう。」とぼやかした質問のほうが優しい言い方になるだろう。

また、⑰-2の「なんとかできないんですか」は「ん」を取って、「なんとかできませんか」、⑰-3の「保証人になる人はだれだろう。」は「だれに頼めばいいでしょう。」とした方がよい。

8) その他

●会話例⑱：「国際課のスタッフはとても役に立ちます。」

背景：初中級作文で自分の国の大学の後輩に、熊本大学への留学を勧める手紙を書かせた。留学生の書いた作文の一節に、「熊本大学の授業は全部日本語だけで教えられる。生活は大変だけれど、先生と国際課のスタッフはとても役に立ちます。だから心配しないで。」と書いてあった。

解説：辞書やコンピュータなどの物は役に立つと言えるが、先生やスタッフなどの人を役に立つと言うとかなり失礼になる。冗談めかして「あいつはなかなか役に立つ／使える。」と言う場合はあるが、面と向かっては言わない。

ここでは「国際課のスタッフはとても親切です。」が適切。

会話例⑨：「どうでもいいです。」

背景：病気で授業を欠席した学生が休んだ日の小テストを受けたいと言うので、その日時を相談した。「木曜の3時と金曜の1時、どちらがいいですか。」と筆者が聞いたら、「どうでもいいです。」と返答した。

解説：この留学生は「どうでもいい」と「どっちでもいい」を同じだと思っていて、「どうでもいいです。」は丁寧な言い方だと勘違いしていた。実際には、「どうでもいい（です）」と言うと、「そんなくだらないことに興味はない、勝手にしてくれ。」というなげやりなニュアンスがある。ここでは、「どちらでもいいです。」を使うべき。丁寧さのレベルによって、「どっちでもいい。」や「どちらでもけっこうです。」と言える。

●会話例⑩：「まじ？」「あのね。」「うんうん。」「そうそう。」

解説：留学生の中でも特に学部レベルの学生の中には、アルバイト先やサークルなどの同年代と話すなかで覚えたのか、上のような言い方が口癖になり、丁寧体で話していても、途中でこのような言葉が入り交じる。

そんな言い方は年上の人には失礼だと注意すると、本人たちは全く知らなかったとびっくりする。流暢な日本語と勘違いしているケースが多いようだ。

## むすび

以上、日本語学習者がそのつもりはないのに、相手の日本人に失礼な言い回しをして悪く思われる用例について具体的に考えてみた。良好な対人関係を築くには、相手に失礼だと思われないよう言い方に注意を払う事が重要だということを、筆者は以前「対人配慮スキル」という造語で説明を試みたが（マスデン、2006）、それは留学生と大家さんとの関係がこじれた事例をもとに、互いに相手の立場に立ってものを言うという交渉のテクニックについて論じたものだった。

本稿では、そのような交渉のテクニックの一手手前の、外国人の日本語での待遇表現の間違いをとりあげた。これらの間違いは、一見したところ文法



上は正しく、待遇表現の間違いだと思いきにくいいため、日本人からは分かっている、わざと失礼な言い方をしていると誤解されやすい。個人差はあるものの、日本語学習者は上級レベルになってもこのような待遇表現の失敗をおかしやすい。これを防ぐには、どのような表現が日本人にとっては失礼に聞こえるのか、代わりにどう言うのが適切かについて、具体例を示しながら教えることが大切だ。このような教材の素材として、筆者が耳にした用例を本稿にまとめてみた。今後、用例を増やしつつ、外国人の失礼な日本語表現について考察を深めていきたい。

## 注

- (1) 『月刊日本語』(1993年11月号)の編集部は、①日本語教師に聞いた「私が外国人の日本語にカチンとくるとき」、②在日外国人に聞いた「日本人の日本語にムッとするとき」という二つのアンケートを行ったが、ここでは本稿に関係のある①のみを取り上げる。①には具体的に以下のような日本語表現が挙げられた。
  - ・「あなた」の多用
  - ・～たい、ほしいを使って教師の欲求をたずねる（先生はこの宿題を見たいですか。先生もジュースがほしいですか、など）
  - ・理由の「ので」の代わりに、「から」を使う（私は忙しいですから、来週は休みます。私は買物に行くんですから、早退します。）
  - ・（先生に証書の翻訳を頼む時に）「先生、頼みましたよ。」
  - ・（受験指導をしてあげた学生から）「先生、なかなか親切ですね。」
  - ・先生に対し、「そうねー」「あのねー」の使用、など。
- (2) 待遇表現を広い概念としてとらえる立場として、蒲谷（2006：59）は、待遇表現を、「敬語」を用いた表現（「敬語表現」）、敬語は用いず通常の言葉を用いた表現（「通常表現」）、「やがる」などといった「軽卑語」を用いた表現（「軽卑表現」）のすべての表現を含めている。

## 参考文献

- 井出祥子、他（1986）『日本人とアメリカ人の敬語行動』（南雲堂）
- 井出祥子（2006）『わきまへの語用論』（大修館書店）
- 大浜るい子（2006）「待遇・敬意表現」縫部義憲（監修）・町博光（編集）『講座・日本語教育学 第2巻 言語行動と社会・文化』（スリーエーネットワーク）
- 蒲谷宏（2003）「『表現行為』の観点から見た敬語」北原保雄（監修）・菊地康人（編集）『朝倉日本語講座8 敬語』（朝倉書店）

- 熊井浩子（2003）「『待遇表現』の諸側面と、その広がり ―狭くとらえた敬語、広くとらえた敬語―」北原保雄（監修）・菊地康人（編集）『朝倉日本語講座 8 敬語』（朝倉書店）
- 月刊日本語編集部（1993）『『先生、あなたはよくできました』―日本語教師がとまどう外国人の日本語』 p.p.4-11 『月刊日本語』 1993年11月号
- 杉山アイシェヌール（2003）『外国人から見た敬語』、北原保雄（監修）・菊地康人（編集）『朝倉日本語講座 8 敬語』（朝倉書店）
- 館岡洋子（1993）『『そんなつもりじゃない』学習者にどう教えるか ―教師の指導法を考える―』 p.p.12-15 『月刊日本語』 1993年11月号
- 牧野成一（2006）『言語能力・伝達能力・社会能力』縫部義憲（監修）・町博光（編集）『講座・日本語教育学 第2巻 言語行動と社会・文化』（スリーエーネットワーク）
- マスデン眞理子（2006）『日本語学習者が対人配慮スキルを学ぶことの意義』『熊本大学留学生センター紀要』第10号（熊本大学留学生センター）